

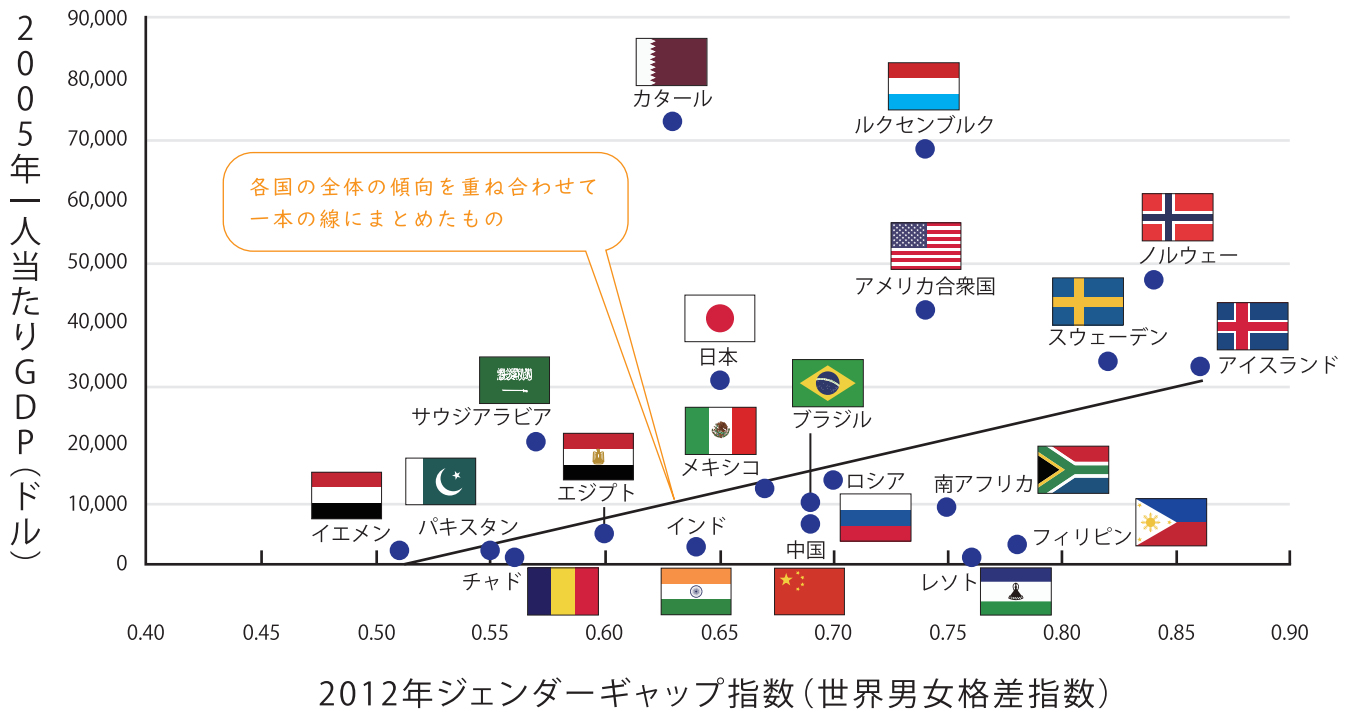
live

ライブ
live: 「自分らしく輝いて生きる」という想いを込めた男女
共同参画推進のための情報誌です。ぜひご覧ください。

CONTENTS

- 2 特集 オトコ目線の男女共同参画
- 7 Crossword / Books
- 8 「私の宝物」 湯川 れい子さん

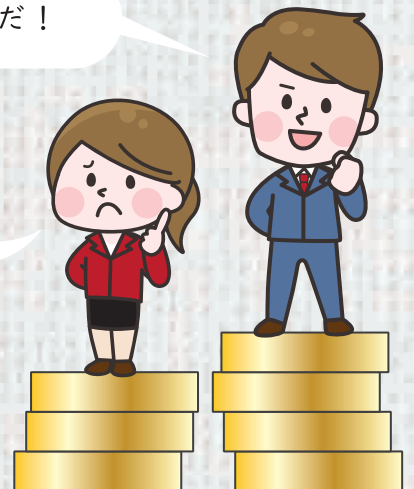
一人当たりGDPとジェンダーギャップをクロス集計すると
ジェンダー平等度の高い国ほど一人当たりGDPも高いという傾向が見出せる!!



Source: Global Gender Gap Index 2012 and the World Bank's World Development Indicators(WDI) online database 2011, accessed June 2012.
Note: The Global Gender Gap Index has been truncated to enhance readability.

0は完全不平等、1は完全平等なんだ!

世界経済フォーラムが2006年から発表している男女平等の国際ランキングであるグローバルジェンダーギャップによれば、2006年に80位(115カ国中)だった日本は、2018年では110位(149カ国中)と大幅にランクを下げているわ!



特集

オトコ目線の男女共同参画

京都産業大学教授
京都大学・大阪大学名誉教授

伊藤 公雄 氏

女らしさ、男らしさを求められることは多いけれど、「らしさ」を外してみると、意外な自分、本来の自分がよく見えてくるものです。今年度のセンター講座で大好評だった伊藤公雄先生のお話を誌上講話としてお届けします。



プロフィール

1951年生まれ。京都大学文学部・同大学院博士課程で社会学専攻。その後、イタリア政府給費留学生としてミラノ大学政治学部留学。京都大学文学部助手、神戸市外国語大学講師・助教授、大阪大学人間科学部助教授・教授を経て、京都大学文学研究科・文学部教授。

現在、京都産業大学現代社会学部客員教授・ダイバーシティ推進室長、京都大学・大阪大学名誉教授。日本学術会議会員、国立女性教育会館監事など。

専門は文化社会学、政治社会学、ジェンダー論。

著書に『光の帝国・迷宮の革命』（青弓社）、『戦後』という意味空間』（イナパクト出版会）、共著書に『共同研究戦友会』（田畑書店）、『戦後社会の中の戦争』（世界思想社）、『唱歌の社会史』（メデイアランド）などがある。

はじめに

研究テーマのひとつとして、男性を対象にしたジェンダー(性差・性別をめぐる)政策の比較調査を進めてきた。なぜそんなことをしているのかといえれば理由ははっきりしている。

男性が変わる、男性を変える必要が、現代日本社会においてきわめて重要な課題になっていると考えたからだ。

1970年代以後、国際社会は性差別撤廃の方向に舵を切った。経済先進国でも発展途上国でも、女性の社会参画は急速に進んだ。ところが、日本社会は、このジェンダー平等(とりあえず、「男女の固定的な二項図式に縛られることで生じる差別や排除の構造の撤廃」というような定義を考えている)という課題については停滞した状況が続いている。世界経済フォーラムが2006年から発表している男女平等の国際ランキングであるグローバルジェンダーギャップによれば、2006

年に80位(115カ国中)だった日本は、2018年では110位(149カ国中)と大幅にランクを下げている。日本のジェンダー状況が悪化しているわけではない。日本社会も少しずつジェンダー平等の方向に進んでいる。しかし、他の国のスピードが早いので、どんどん取り残されているのだ。

ちなみに世界経済フォーラムは男女平等を目標とする人権団体ではない。周知のように経済の持続的成長を協議するための国際組織だ。その組織がなぜ男女平等度を問題にするかといえば、答えは簡単だ。一人当たりGDPとジェンダーギャップをクロス集計するとジェンダー平等度の高い国ほど一人当たりGDPも高いという傾向が見出せるのだ。つまり経済成長のためにはジェンダー平等^{※2}ダイバーシティ戦略が必要だと、世界経済フォーラムは考えているということだ。

※1 男女の固定的な決めつけによる差別や排除の撤廃。

※2 性別、宗教、世代、出身国など、多様な人々の視点の交流によって新しい発想を生み出し、組織を活性化させる戦略。日本ではまず、女性の参画が問われることになる。

「進んだ欧米、遅れた日本」?

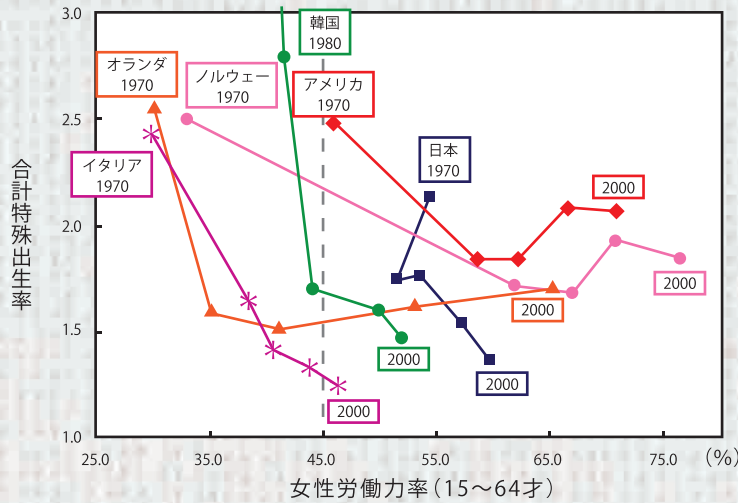
とはいっても、「進んだ欧米、遅れた日本」のように考える必要はない。ジェンダー平等の動きが国際的に本格化したのは1970年前後のことだからだ。60年代後半以後の社会的マイノリティの権利擁護の動きと連動して「世界最大の人権問題」と国連が呼んだ女性の権利に光が当てられたのだ。それまで、欧米社会も含めて世界中が女性の社会参画を抑制してきたのだ。

たとえば、フランスで「既婚女性が夫の許可なく働く」ことが法律上許されたのはいつのことか、ご存知だろうか。1965年のことだ(スイスでは、同様の法律が1985年まで残っていた)。ヨーロッパ諸国の多くが「ナポレオン法典」以来の家長制を法制度に内包していたのだ(スイスの例にみられるように、法律上の家長制の完全な消滅は、ヨーロッパ全体で見れば1980年代頃まで待つ必要があったはずだ)。

1970年代の欧米のフェミニズムの二大課題であった(協議)離婚と(経済的理由などによる)中絶の権利は、敗戦後の日本では、家長制の廃止とともに、女性の権利として確立されていたこともおさえておきたい。

1970年代以後欧米で女性の労働参加が拡大した背景に、これらの経済の発達した社会の多くが不況に苦しんでいたことをあげてもいいだろう。国際不況のなかで所得の低下に直面しはじめた男性の状況が、世帯収入確保のために、専業主婦だった女性たちの労働参加を生んだともいえる(性差別撤廃の国際的なうねりが、これを支えたのはいうまでもない)。

ただし、主要国では、こうした女性の労働参加は、男女の家族的責任(育児や家事を含む)と仕事の両立という流れにつながった。男女の労働時間の短縮の一方で、保育所の整備や子ども手当等の家族政策の充実も、この時期に拡充されたといっていいたいだろう。



【図表1】
女性の労働と少子化

図表1は、1970年から2000年にかけてのOECD^{※3}加盟国の合計特殊出生率と女性の労働力率の変化を示したものだ。すぐに理解できるように、1970年段階では日本の女性労働力率は、極めて高い。しかし、その後の30年の経過をみると、他の諸国の女性の労働力率の伸び

と比較して、日本の動きがきわめて弱かったことが見て取れる。

※3 先進国間の自由な意見交換、情報交換を通じて、経済成長、貿易自由化、途上国支援に貢献することを目的としています。

それでは日本は

多くの国で女性の社会参画が進んだ1970年代、日本社会は、独特な対応をみせた。「男性の長時間労働+女性の家事・育児と条件の悪い非正規労働」という仕組みを確立したのだ。「24時間戦える男性(それは、過労死の増加など、人間らしいとはとてもいえない男性の状況を生み出した)と、それを影で支え、さらに安価な非正規労働を担う女性たち(結果的に、世界でも稀なほどの女性の社会参画における遅れを作り出した)」というこの時代に特有の日本のジェンダー構造は、興味深いことに、70~80年代の「安定成長」^{※4}「ジャパン・アズNO.1」の時代を生み出す原動力でもあった。

しかし、1990年代、この構図に縛られることで、この時期の世界史的大転換の時代に、日本社

会に変化に対応し切れなかった。発展途上国の安価な労働力による製造業の発展を前に、情報やサービスを軸にした多様でフレキシブルな産業と労働構造への方向転換を日本社会はうまく進めることができなかったのである(いわゆる「モノづくり敗戦」である)。

1990年代に入って以後、(名目)GDPが500兆円前後での滞留を20年以上続けるという経済・社会の閉塞感も、このあたりに一つの原因があるはずだ。あまりにもうまく行き過ぎた70年代~80年代型のジェンダー構造がもたらした「成功体験」から抜けきれなかったのもその原因の一つだったと思う。製造業を軸にした男性主導の単色の社会から、情報やサービスを主軸とする(女性の対等な参画を含んだ)多色刷り社会への転換が日本は生み出せなかったのだ。

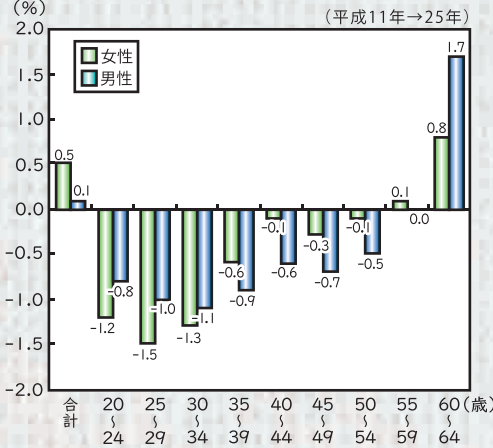
※4 1970年から80年代、ジャパン・アズナンバーワン(ナンバードワンとしての日本)(1979)と題されたアメリカ合衆国の社会学者エズラ・ヴァーゲルの著書の指摘通り、経済の発達した諸国のなかで最も安定した経済を生み出す原動力となった。

少子高齢社会の深化の中で

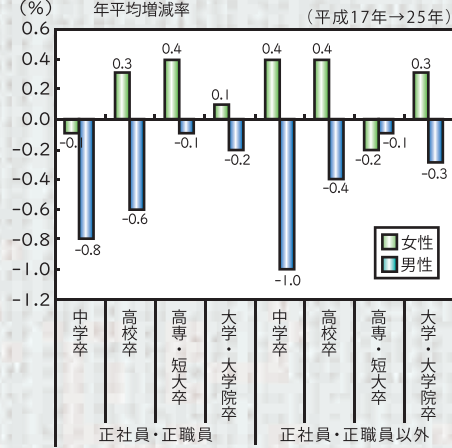
ジェンダー構造の変化の必要性という点では、日本独自の課題もある。少子高齢社会の深化だ。少子化の生み出した「労働力不足」は今や大きな問題になっている。それだけでなく、税や社会保障費を支える人口の減少という大きな問題も生み出している。他方で高齢社会の深まりは、財政負担をさらに拡大するだろう。このままだと社会そのものが維持できなくなりつつあると予想されたのだ。だからこそ、女性の社会参画による社会基盤の拡充が求められていた。そのためには、男女の対等な労働参画とワークライフバランスの充実がまずは必要だ。加えて、高齢者がゆとりをもって社会参加・労働参加ができる仕組み、さらに外国人労働者の人権に配慮した法整備や多文化共生の対応など、少子高齢社会問題への対応は急務だったはずなのだ。すでに、少子高齢社会の深まりを前に、1990年代には準備しなければならなかったこの

一般労働者における平均勤続年数及び平均所定内給与額の変化(男女別)

a. 年齢階級別平均勤続年数の年平均増減率



b. 教育(学歴)別雇用形態別平均所定内給与額の年平均増減率



(備考)
1. 厚生労働省「賃金構造基本統計調査」より作成。
2. 常用労働者10人以上の民営事業所の数値。

【図表2】
減少する男性の賃金

課題に、日本社会はきちんと対応してこなかった。その結果が、「女性の安価な労働力としての組み入れ」、「高齢者の不安定な職業継続」、「何の準備もないままの外国人労働力の受け入れ」が、なし崩しで進められている現在の状況を生み出した(この事態はかなり危ういものだと思う)。

メンズ・クライシス
(男性の危機)と
「剥奪(感)の男性化」

しかし、じっくりみていくと、日本社会でも、これまでの男性基準の社会が地殻変動を起こし始めていることが見えてくる。その結果、労働の仕組みや家族の多様化などをとらえて発展してきたこの変化に、「ついていけない男性」たちが増加しつつあるように思われるのだ。もっといえば、ここ数十年男性サラリーマンの年収は大きく減少しつつある(図表2)。いわば「メンズ・クライシス(男性危機)」状況が静かに日本でも開始されていると思う。とはいえ、この「メンズ・クライシス」は、日本社会ではいまだ可視化さ

れていない。しかし、冷静にみれば「世代を超えた、男性による理由なき凶悪犯罪」や「高齢男性の増加」など、いらだつ男性の姿は少しずつ顕在化しつつあるように思われる。何ともいえない不満や不全感、不安やいらだちが男性の間に広がっているのだ。何かいままでは違う、既得権が失われつつあるようなぼんやりした感情の広がり、男性の間に見られるのだ。「剥奪感の男性化」＝masculinization of deprivation(伊藤、2018)の広がりだ。

この用語は、「貧困の女性化 feminization of poverty」から思いついたものだ。開発途上国の経済発展は、その一方で貧困や格差を拡大させた。しかもその「しわ寄せ」が女性にのしかかっているという状況を示した言葉だ。この状況はまだ続いているし、日本の非正規女性の割合の増加などをみれば、日本社会でも生まれているともいえる。しかし、もうひとつの性である男性たちも、かつて維持していた経済力の喪失や、家庭や職場、地域社会で「何か奪

われている」思いに、無自覚にとりつかれているのではないか。社会の変化、時代の変容に対応できないまま、いいようのない「不満」や「不安感」を多くの男性が抱き始めているように思われるのだ。

こうした「剥奪感の男性化」とでもいえる状況の下で、さまざまな社会的な病理現象が国際的にも生じつつある。たとえば、ここ10数年、経済の発達した諸国で生じている男性を主体とした「理由なき大量殺人」や「性暴力」ハラスメントなどの続発である。現代社会で、「強く、たくましく、競争に勝つ」男であること「の強い要請と、その実現不能性の間で、揺れ動く不安定な男性性が、こうした病理的と言っているような社会現象の背後にあると考えられるのだ。

近年、近代的な男性性が生み出す不安定性について、「Toxic Masculinity トクシク・マスキュリニティ(＝中毒性を帯びた有害な男性性)」という用語が浮上りつつある。

ニューヨークタイムズの「トク

シック・マスキュリニティとは何か」(2019年1月22日付)によ

れば、この「伝統的男性性イデオロギー」には、以下のような3つの行為や信念が控えているという。つまり「感情の抑制あるいは悩みの広がり」「表面的なたくましさの維持」「力の指標としての暴力(いわゆる「タフガイ」行為)」である。

不安定化し、何か「奪われて」いるかのような思いに取り憑かれている男性たちが引き起こす社会病理現象に備えるためにも、男性を対象にしたジェンダー政策(中でも、男性対象の公的相談の充実が重要だ)の本格的登場が必要なのだ。

おわりに 男性のケアの力

冒頭述べたように、ここ10年ほど、男性を対象にしたジェンダー平等政策の国際比較研究を継続している。実際、21世紀に入って以後、国連やEUは、ジェンダー平等社会に向けて「男性・男子の役割」についての調査を踏まえた

政策提案を次々と発表している。

なかでもキーワードになりつつあるのがCaring Masculinity(ケアする男性性)である。他者への「共感能力」に欠ける男性たちは、他者への配慮の力が弱い。さらにいえば、自分自身への配慮もほとんどしない。体の調子が悪くても、無理して頑張るのは、自分へのケア意識の不足だ。ケアする男性性の視点には、他者(さらに自分自身)の生命・身体・人格・思いに寄り添うケアの力の必要性が強調されているのだ。(なかには、男性のケアの倫理を養成することは戦争抑止・平和構築にとっても重要だ、という指摘さえある)。

ただし、ヨーロッパ社会でいうケアは、育児が中心になる(介護の社会化が一定充実しているからでもあるだろう)。しかし、日本では、ケアは、育児というよりも介護のイメージが強いだろうと思う。そこで、このCaring Masculinityを「男性のケアの力」と位置づけ直して、日本にも適応できないか、考え始めている。

なぜ「男性のケアの力」と、

「Caring=ケアする」とは異なる言葉を用いるかといえ、日本社会で男性とケアを問題にするとき、「ケアする(育児・家事・介護する)主体」としての男性性の重要性とともに、「ケアされる」男性性の問題もあると考えているからだ。「ケアされる力」=ケアを受容する力「ケアを受け入れ感謝する力」と男性性という課題だ。というのも、日本では、多くの男性はケアをうまく受容しきれていないからだ(ケアされるといふことは、他者に依存する=男性性を失うということと思ひ込んでいふこともある。また、女性のサポートを「前提」にするという、男性の側からの女性に対する「自覚なき依存」の問題もある)。だから、ケアされる場合でも、威張ったり、命令したりするのだ。逆に、ケアを素直に受容できず(これもまた、他者への素直な依存ができないということだ)、自分の要求をスムーズに出せない男性もいる。自分の弱さを他者にオープンにしつつ、感謝の気持ちでケアを受容する力もまた、今後の高齢社会においては不可欠な課題だと

思う(伊藤、2019)。

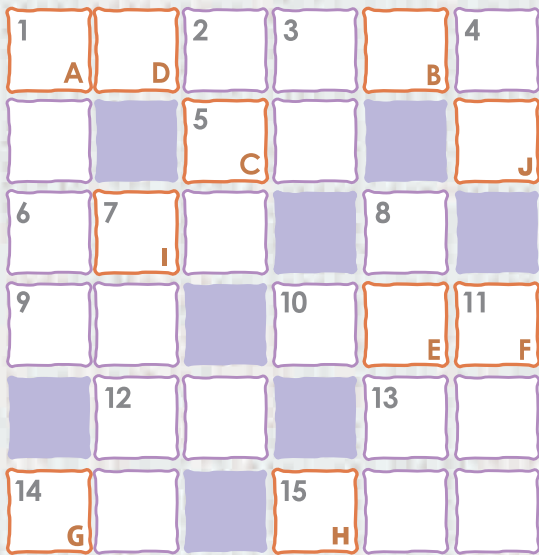
国際社会は少しずつ男性のジェンダー問題に目をむけつつある。しかし、日本社会においては、この課題は、まだまだ「見えなしか問題」になっている。男性を対象にしたジェンダー平等に向けた政策の実現に向けた作業は、まだまだこれから本格化していくことになるのだらうと思っている。

【参考文献】

- 伊藤公雄 1996 『男性学入門』、作品社
- 伊藤公雄 2018 「剥奪(感)の男性化 Masculinization of deprivation をめぐってー産業構造と労働形態の変容の只中で」『日本労働研究雑誌』
- 2018年10月号 (第666号)、pp.63-76. 伊藤公雄
- 2019 「男性学・男性性研究 Men and Masculinities Studies 一個人的経験を通じて」『現代思想』
- 2019年2月号、pp.8-20.

正解者のうち抽選で30名の方に図書カードを差し上げます。

Crossword



- 15 端午の節句に食べる
〇〇ティブ
〇〇シヨン
- 14 もとの〇〇におさまる
〇〇の明星
- 13 〇〇の明星
- 12 〇〇の明星
- 10 恐怖のあまり
〇〇〇がよだつ
- 9 〇〇をもどす
- 6 自分で自分を
いましめること
- 5 他人の機嫌をとる
愛想がいい言葉
- 1 日本語で金剛石

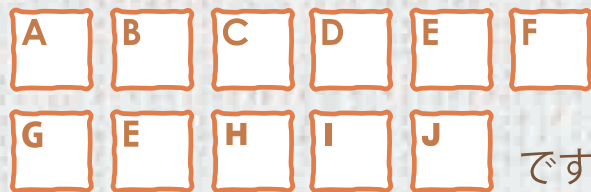
ヨコノカギ

- 11 木の名前
別名「ツキ」ともいう
- 8 大内の〇〇〇〇
〇〇〇〇バツタ
- 7 風力・水力・
〇〇〇〇発電
- 4 〇〇焼き
〇〇猫
- 3 言語を書き記す
ための記号
- 2 〇〇〇動物園
〇〇〇〇の王国
〇〇〇〇の証明
- 1 山口市〇〇〇〇共同
参画センターは
市民館の前の建物

タテノカギ

- 応募資格 市内在住か、在勤の方
- 応募方法 3月16日(月)までに、はがきに答え・郵便番号・住所・氏名・年齢・感想をご記入の上、下記へ送付してください(当日消印有効)。
〒753-0074 山口市中央二丁目5-1
山口市男女共同参画センター ゆめぼぼら 宛
※正解者のうち抽選で30名の方に図書カードを差し上げます。
なお、当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。

答えは、



これらの図書は、山口市男女共同参画センターにて貸し出しています。

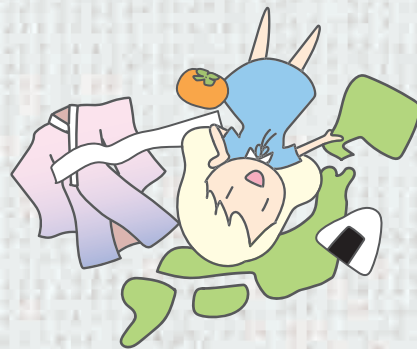
Books



「男らしさ」という鑑は、「自分を変える」ことをなかなか許さない。変えることが今までの自分の負けを認めると考えるから。高度経済成長期時代から闘い続け、社会の変化や変容に対応できないまま、とまどう男たちに何が起きているのか。

著者 伊藤公雄氏 山中浩司氏
《大阪大学出版会》
2016年7月6日発行

『とまどう男たち』
生き方編



現在、都内の専門学校グラフィックデザイン科に通う、スウェーデンからやってきた来日3年目のオーサは、毎日何かに感動したり不思議を発見したり。そういう外国人から見た日本の魅力や文化の違いを4コマ漫画で描いています。

著者 オーサ・イェークストロム氏
《KADOKAWAメディアファクトリー》
2015年3月6日発行

『北欧女子オーサが見つけた日本の不思議』



湯川 れい子さん

プロフィール
音楽評論・作詞家

ジャズ評論家としてデビュー。独自の視点によるポップスの評論・解説を手がけ、エルヴィス・プレスリーやビートルズを日本に広めるなど、世に国内外の音楽シーンを紹介し続けている。

作詞家としては「涙の太陽」、「ランナウェイ」、「センチメンタルジャーニー」、「六本木心中」など多数。また、ディズニー映画「美女と野獣」、「アラジン」などの日本語詞も手がけている。

私の宝物

人生は、まさに「出会い」です。たまたまラジオから流れてきたその人の声に魅せられて、いつか正面から会いたいと考えて、実現するまでに15年。

私を突き動かしてくれたのは、ただのファンなら相手には貰えない。だから音楽ジャーナリストとして認められる存在になりたい！と頑張れたこと。

その間にも、沢山の素晴らしい出会いがありました。その声の主の名はエルヴィス・プレスリー。衝撃の声を聞いてから、今年で64年になります。そして、私の音楽業界でのキャリアも、今年でなんと60年！実に幸せな日々でした。

また出会いは、未知との遭遇でもあります。パツタリ出会う相手は、時に子どもだったり、有名無名を問わず。病人も居れば老人も居ます。

でも、縁は異なもの味なもの。ふと周りを見渡してみれば、あの時の子どもが今は成人となって私と一緒に重要な仕事をしていたり、あの病人のお医者様だった人に、今は私がお世話になっていたり。

そして、今は亡き老人のお孫さんからは、今年もお正月に美味しい干柿が送られてきました。

山口市とのご縁もそうです。今から15年ほど前に、日本でもゴスペルが盛んに歌われるようになった時、ゴスペルを指導していた歌手の亀渕友香さんから、日本語で歌えるゴスペル曲を作って下さい。と手渡されたメロディー入りのカセット・テープがありました。

その作曲をしていらしたのは、お父様が有名な作曲家の宮川泰さんの息子さんで、まだ無名だった舞台音楽の宮川彬良さん。起伏の無い長い曲だな・・・と思いつつも、このメロディーなら書いてみたい、と思うコンセプトがありました。

それは、こんなに平和で教育も

行き届き、食べる物にも困らない国で、いじめや鬱や病苦で3万人もの自殺者が減らないこと。東北大震災が起きるより5年ほど前の話です。

私たちひとりひとりの命には、何千年何万年の間、戦争や災害で飢えて苦しい時も、親が子を守り、必死で助け合って生きて来た歴史が刻み込まれているのだから、その事を思い出して、どんなに辛くとも必死で生きて欲しい！と、願ったのです。

その歌を亀渕先生が、山口きずな音楽祭のワークショップで指導して下さったご縁から、いつか「山口をクリスマス市にする」というプロジェクトのテーマ・ソングに「きずな」が選ばれて、今年で12年目。

そう、人生はまさに「出会い」なのです。出会いの前に人を選んだり、出会ってからも値踏みをして選んでいたら、きっと結果はつまらないものになると思えてなりません。